1993・8

通信 おなご 41

■岩手県北上市和賀町長沼5へ3ー43ー3・麗ら舎・小原麗子

カド・――あの頃は、保存食。春になると、カド（ニシン）買って軒下につるして干してあるんだが、オラ子どもの時、つるしてあるやずがらカズノコ取って食ったもんだ。

ナニ、家のものも、外のものも関係ねえのだ。（笑）

年取った人だちに、叱られながらもサ。野良猫みでえにしてサ。食えるものは、とにかく口さえれで生きたのサ。（笑）

カドは、一ぺんにドーッと買ってきて、酢漬け作ったり、酢漬けの味は、その家、その家によって違う味だった。

そういう保存食を食べながら田植えしたのサ。

秋頭（くわがしら）金豆・――オラ、子どもの頃は、この辺で二十人、三十人とたのんで田植えのする家は大田植えと言ったんだ。

その頃、三町歩（三ヘクタール）っていうと大きな百姓だったからサ。

人たのむ時は、「歓頭」っていうて、ちゃんとリーダーがあって、その人さたのめば、頼う人をまとめてくれる。

「オレで、いずの日何人たのみでえ」って言えば、まとめてくれる。

その場合、植える人ばり来られたって ダメだが、苗取り何人、植える人何人って言うてたのむ。そうすれば、それだけちゃんと見つけてくれるわけ。もちろん、その人も一緒に来て稼ぐし、それなりのお礼はする。

朝めし、小昼、昼めしと、一日何回も食べるが う、食事の支度をする人は、外のことはぜんぜんかまっていられねえ。

今めでえに、魚屋たのめば持って来てくれるのど違うから。

オレで、おふくろは、両方やったのサ。

人たのんだ時は、家の中のこと。人たのまねえ時は、自分で稼がねえねえ。

うだから、おふくろは、小学校さ一年もスらねえだども、肥料散布にしてもナ、田んぼの大きさみな別々だべ。それが手加減で分かるらしくてナ、ちゃんと散布したの。

科学肥料使う時でも、この田は大きがら、このぐりえって、手加減で分がる。カンだべナ。

縦ナワ植え。

――代かきの終わった後は、エンブリ（田の表面をならす道具）すり、あの仕事、ひでえがった。

オレの方は、型置き（型付植え）って、ほとんどやらないで、縦ナワ張りだ。（縦にナワを張り、ナワの間に入って、後退しながら植える方法）いまだって、手で植える時はナワ張ってやる人もある。

型置きしないのは、土に関係あると思う。こっちの方は、一たん、田んぼ干したりすると、堅くなっちゃって植えるのが、とても大変だし乾かしたら最後、割れで田植えもなにも出来ねえ。粘土の強い所は、型の跡もちゃんと残るし、すぐ田がひび割れるなんていうことはない。

苗運びとナワ張りはろくどものは事と決まってる。田植えで人たのむ時は、必ずろくどもたちをたのまねえば、ねえんだお。家の人ばりで足りねえがらミミ。

一輪車で運ぶ前は、カゴで運んだ。植えるばりになった田さ、苗を全部投げでしまうの。ナワ張ってがら投げると、ナワさ苗が落ちでグニャンと曲がる。それさ気ずかねえで植えてると、スラリ曲がったりすてミミ。

田植えの能率。

――家では、何十人ってたのんだのは、せいぜい二日。真中だけやってもらってサ。

まとまった場所はたのんで植えて、後は家の人たちで植えた。田んぼの散らばっている所は移動だけで、時間がかかる。いまのようにトラックもねえすナ。みな、アヒルみてえに歩ってサ。（笑）

それでも、かなり遠くからもたのんだよ。

あの一。七線、大坊の辺りからも、歩いて来た。

江釣子の人たちよりは、こっち、藤根が稼ぐ。藤根よりは笹岡（花巻市）稼ぐ。湯本、湯口、それから、あっちさ行って石鳥谷（稗貫郡石鳥谷町）あっちは、絶対稼ぐ。

とにかく一人して、一反歩（一〇アール）植えるんだしゃ、一日に。

たいたい、この辺りでは苗取りとそれから植える人でナ、二人して一反歩っていうのは、相当、能率の上る人だナ。苗取る方は、先に終わっちゃうから夕方行って植えるのを手伝って、二人で一反歩植える。

この辺りでは植えるだけだったら、一人五畝歩（五アール）っていうのが相場だった。

中には、七畝から一反歩植える人もあるが、平均すれば、五畝歩ぐらえすが、見られねえだけ。田んぼの条件もあるし、いろいろ条件あるけれども……。

いまは、一町歩も植える。田植え機械、四条植えで、一番植えだ話しを聞いたのは、二町何歩植えだって……。歩くやすで……。

乗用だと、オレではいま、六条でやってんだが、二町歩、楽だねえが……。苗をつづける人次オだなあ……。

そうだ。一反歩と二町歩、いまは二十倍。

話すにならねえのサ。

それで、昔のくりえ作業時間、稼せてねえたよ。朝も八時頃だし、昔の半分くらえたなあ実労働は……。ぜんぜん違う。

共同作業やった時は、実労働は十二時間。休み時間抜いて……。田植え前から田植え、とにかく米作りっていうのは、全精力、全力投球してサ、寝ねえで稼せだっていうのはこのごとサ。

子どもたちも、サセ取り、赤ん坊があれば女の子は、子守りサ。男の子は、三年生、四年生、高学年になれば、ほとんど田植えさかしやらねえ（参加しない）奴、ねえがったなあ。老若男女、全員、家族総ぐるみ、そのために学校には「田植え休み」してあったんだ。

（つづく）

（一九九二年四月五日／北上市和賀町藤根／石川忠見さん・69歳／談）

ほとぼり

高橋ふさ

朝明の曇れる空に料の花盛りを過ぎし色しづまりぬ

日の暑き畑に鍬とるわが影の短かくなりて昼となるらし

晴天に青く乾ける干し草のほとぼりまとひ夕べ帰り来

干し草をひと日運びてほとぼりをまとひ夕べの厨に立てり

梅雨晴れし昼の路上に製鉄所の錆びたる工具は日に照らさるる

展勝地の桜を伐りて校庭に炭を焼きたりき大戦のとき

同じこと繰り返し言ふ老母にわれの未来を相見るごとし

時をかけ品評会に出す菊を送り終りて宵の雨きく

やうやくに父祖の法事を終へし夜を広き座敷にひとりとなりぬ

雑木々に残れる枯葉吹かれつつ農協合併の説明進む

垂乳根の里便り

まつを媼・聞書 17

34 石い純子

わだしの一番最初の生徒達、八十八になったド。ありゃ、「オラ、ぎったりカギになって、先生の方まッつぐだ（自分はカギの様に腰が曲がったのに先生の方がまっすぐだ）」て言ってたマサ子、赤い布団サねまって（座って）、米寿の祝いなんだド。

――ン、隣のアキさん語ってだっけ。

マサ子達書いた綴り方、オレ、持ってだがしゃね（かも知れない）。

新卒のほやほやッ頃で、みすとかがって（一生懸命になって）、夜昼、寝てても教える気になって教えだンだオ。あのあたり、下手くせ男の先生より立派なこと教えだと思うよ。

あの時代、わだしは花だっタ・・

アキさんサ、

「マサ子に、（教えられたこと）何覚でるか、聞いて見ろ」て言ったキャ、

「まつを先生、恋愛してだ」ッことばり覚でるッんだナ。（笑い）

なんたらゴったべ。

「あら、あそごに二人いる！」なんッことばり覚でンだド。（笑い）（恋愛の相手、清一氏は同僚）

（笑いながら）恋愛なぁ・・そいつでばり、味噌つけたもなー（面目を失った）・・

しかし、この頃は「恋愛」もてる時代になったよ。

今、皇太子様だて恋愛だダラ。（でしょうよ）

天皇様も・・

オラだ、七十年も前にやってみせた。後について来いって。

オレ、恋愛の先生だも。（笑い）

恋愛するのも命がけの時代だった。あの恋愛御法

度と の時代、よくオレだち首にされねがった。

マサ子も、八十八になったてか・・

あのあたり、学校の先生として、神様の位みすとかかった時代だ。

「わがすすむ道はひと筋ひと筋よ行きうるまでを行きてこそみん」なんツ歌コ作って・・

こいづネ、ペスタロッチのようになって、教え子達と一緒になって進む気で作ったの。

ペスタロッチみでに、貧しい子供たちを相手に農村で生きるンだって・・ペスタロッチのスタンツ（孤児院）のように・・純情だったな。実に純情だっタ・・

ペスタロッチを理想として赴任したンだもの。

ぼろっコ着た生徒、後ろの方サおばれるのだの、抱かれるの、さっぱど（全部）すがらせたペスタロッチの絵、部屋サも飾ってだったよ。

――あの時代？

――赴任したの、大正三年。

みな、食えない時代。

貧しい人たちサ役場で仕事与えて、昼ご飯煮炊きして食わせもしたンだが・・裁縫室の窓から、

「あんなに蓋コ取ったら、煮えねべ」って、見たっタ、腹減ってハ、次々蓋コ取って見ンだっけ。

米のお粥かなんか煮てたンでねーが？

赴任すッ時、自分の信ずるものは何か、心に何を持っていくかとなッと、やっぱりペスタロッチだったネ。

教育史の中で涙コこぼしながら習ったタ、純子さんも習ったべ？

――ナニ、オレ、「立派」だって？

さっきから「立派、立派」て、純子さん「立派」て語るより知ねンでねーが（笑い）。

さっぱ「立派」でねーダラ。

生徒しか自分の心になかった・・

そやって（そのように）みすとかかったのに、生徒達覚でンの「恋愛」だツもや。（笑い）

教えンべとして語ったことより、して見みせた方覚でンだもな。

まつを媼・満98歳2ケ月・冬

祖母

15

高橋　ミツ

祖母の亡くなる一年か二年前のことであった。同じ職場にいる定年近い人に、ショッキングなことを言われたことがあった。

祖母には、九人の子供がいて、男は、私の父を入れて二人だけ、そのうちの五人までが、五キロ程はなれた部落に嫁がせていた。

まだ、十四、五歳のころに、みんな泣きながら嫁いだと、祖母からきいたことがある。どうして、そうまでして嫁にやったのだろうか。

祖母は、「嫁に行くとは、皆そんなものだ」、と言っていた。

その職場の人は、「俺も、九右エ門家（私の家の家号）の娘が一人ほしかった。だのに、一人もくれなかった。ことに、あの人（叔母の一人）がほしいと何度も言ったのにくれなかった。いまは未亡人、あまり幸せではない。俺のとこへよこしてれば、もっと、しあわせだったんだ。俺の軒下に、ちらばって、お前のじいさんはあさんのおかげで、うらんでるよ」という意味のことを言われた。俺の軒下とは、自分の家の周りに皆、嫁いだということだった。

それから、祖母の若いころの話を持ち出したのだった。祖母は、兄一人いるだけの二人兄妹。大きなカマドの家だったから、隣に分家させて婿を取り、女の子も一人いた。

そのうち、九エ門で嫁さがしをしているのを知り、田んぼを持参金にしてくれてやることにしたという。婿は返した。

こちら、九エ門の家の跡取りは大して美男子でもないし、なかなか、適当な人もいない。昔は、家と家の結婚だから、まず、つり合いはとれたろうし、オー、田んぼを持ってくるのに目がくらんで、もらうことにしたそうな。

それまで、夫と仲良くくらしていた祖母は、無理矢理はなされて、私の家へ来たのだという。

その話を聞いた私は、本当にショックで、仕事をしている間にも、そのことで頭がいっぱいだった。

祖母は、夫と仲良くくらしているのに、どうして親の言うことを聞いたのだろう。

祖父は、本当に、祖母名儀の秋田にある土地へ田んぼ」に、目がくらんで、女の子までつれて来た祖母を受け入れたのだろうか。

それにしても、子づれの嫁の立場は決して生やさしいものではなかったはずだし、私の曽祖父は、割合いギリッとしたきびしい人だったらしいし、曽祖母はまた、いつもいつも、グジュグジュ、何か小言を言って、「かかなぐ」人だったそうだし、祖父は短気で、青すじたてやすい性格、苦労は、覚悟で来たのだろうか。

毎日、そんなことを考えて、一度祖母の本当の気持を聞いておこうと思った。無理矢理だったから、仕方なかった。祖父には祖父の訳もあったし、ということを、祖母の口から聞いて安心したかった。

しかし、その時はもう、祖母、かわいそうな人になっていて、聞いたらもう、立ち上がれない位ショックではないか、孫の言葉は痛いだろうという思いになり、どうしても聞けなかった。

気をつけて見ても、祖父母は実に仲良く、ケンカしても、祖母の方が「ふん」というか、「はははは」と大きな声で笑うかで終わった。

また、祖父もなさぬ仲の一番上の娘も、ほとんど変わりないあつかいであった。

祖母には双子が一組いて、一人は里子に出し、物心ついてから引き取ったために、親子共につらい思いもしたらしいし、私の知らない様々な苦悩をのりこえてきたことは察しられた。

私は知らない方が良いのではないかと思うようになった。知ったところで、祖母への思いはいまさら変りはしないだろう。

ある春の、種播き桜の咲きはじめたころ、私が勧めから割合早く帰る途中の夕方に、いとこが急いで自転車を走らせて来るのに出会った。

「いまごろどこへ？」と言うと、「婆が具合悪くて知らせに行く」と通りすぎて行った。

毎日おそれていたものが、とうとう来てみると、私は割合おちついているのに気がついた。

祖母は、座敷に寝かされて、大きないびきをかいていた。まわりには、もう村の人が集まっていて、母が祖母の手を取っていた。

お風呂から上って、着物を着ようとしている時だったという。祖母が、あれほど口ぐせにしていた「寝込まないで、風呂から上ったまま、苦しまないで、寒くない時、死にたい。とても思い通りにゆくもんではないが」と言っていたのそみ通りに、桜の季節に、しずかに逝った。

台所には、食べたばかりの食器に、味噌汁が少し残って、二十膳位の、いつも使っている小

さなアルミバケツに、祖父の分と重ねて置いてあった。祖母が置いたそのままであった。

私は、涙が出てくることも、おどろくこともなく、ただ固かないでよかったと、ホッとした気持と、とうとう死んでしまったというあっけなさだけだった。

ふしぎなことに、涙一つ出てこなかった。

ふしぎに心の片一方に青空のようなものが残り祖母は、私に何も知られずに死んだことを安心したのではないかと、思うのだった。

母も、兄も姉たちも、しみじみといい人だったと、まるで夕メ鬼のように言い合っていた。

（おわり）

あとがき

■「通信おなご」40号をありがとうございました。まつを塩が亡くなったのですね。ご立派な最後でしたね。高橋ミツさんの祖母も毎回楽しみにしております。私が小さい頃に抱かれて寝た祖母のしなびたおっぱいや、ザラザラした足の感触がよみがえります。私たちはこういう祖母を持っていたのだなあ—と改めて思いました。

「人は生まれてきた時と同じように、死ぬ時にも、人さまのおせわになるものなのよ」という人、「できるうちは、はってでも自分のことは自分でする。誰かにしてもらおうなどと考えるな」と、老人ホームのボランティアをしている人はいます。

身近なことなのに、ちっとも実感がわきません。そして、ミツさんの祖母にほっとしています。

横浜市鶴見区・生方孝子

■まつを塩の急逝を知りまして、残念に覚えました。天寿を全うなされたとしても、惜しい方を亡くしてしまいましたね。石川さ

んの動転の程が目に見えてきました。

四十号ありがとうございました。早速読ませてもらいました。毎号感心してしまうのは、石川忠見氏の一文です。面白い書きの忠実さも大きくものを言っておりますが、さりげなく語っている一語一語のあとに残る印象は、はてな！今、詩を読んだのかなと思う程です。それは、私どものように、頭だけや文字面、あるいは軽薄な知ったかぶりで物事をとらえているのではなくて、氏は、体の芯で、心で物事をとらえているからでしょう。そこから吐きだされる言葉は詩になります。

そんな事を感じながら、ふさ女史の〝子守唄〟を拝読。〝二体のミイラいま現はる〟に続く十句、正に、叙事詩ですね。しかも、三十一音でさらさらまとめていますが、すべてを表現し尽しています。文章でしたら原稿用紙一〇枚ぐらいでしょう。さすがですね。

とても楽しく読ませてもらいました。重ねてお礼申しあげます。

金丸事件に続く日本の政治の有りようには、怒以上のものを覚えてしまいますが、世の中をよくするのは、結局のところ私たちの責任が大ですね。

横浜市保土谷区・原田周治

あとがき

■まつを媼が急逝された由、ほんとにさびしく思います。純子さんもごくろうさまでした。

面書きはまだ続くとのこと、大切に読ませていただきたく存じます。石川忠見さんの田植えの様子は、二十年前に連れていってくれます。一番きらいだった忙しい時でした。

祖母と母がけんかし、私と母がけんかして、賢い父は無言で、若い夫は私のカタをもって発言して事態をもっと悪くし……やっと昔のことになりました。

ふさこさんの歌は、ゆとりのユーモアがあって好きです。ミツさんの「祖母」も何ともあたたかですね。「橋を渡る日々」が単行本になるのを待っています。

島根県江津市・多田恵子

■まつを媼さま他界されたようで。手元に第4回さいたま国民文化祭日本の詩全国コンクール大賞作品集があります。大宮市長賞になった中川あきこ「樹のようにしはこんな書き出しで始まっています。

ヘケニアでは／ひとりの老人が死ぬことは／ひとつの大きな図書館が焼けるのと同じだという／彼の地では／老人はくにの語り部

だからと／そういう意味なのだけれど／〉
冥福を祈ります。

宮古市・中澤　彰

■いつかあなたが朝日新聞論壇にお書きになったことが的中してしまいました。国際ボランティアで活躍する邦人青年の死。折から北上中の桜前線は春寒によりストップ。これも天の配慮というべきか。昔、桜のごとく潔く散れと、〇〇のために潔く散れ、と教えられてきました。そしていま、異国で故なく桜は散りました。悲しく憤り、てして不安です。「国連」は大丈夫でしょうか。

さて、「おなごし」のお礼を書くつもりが脱線してしまい、すみません。

一字一字いのちを刻むように「おなごし四十号ありがとうございました。再読しております。

下の花〈絵〉は「花だいこんし」ミ花ことばは「不戦の誓い」。退職婦人教職員の会のシンボルフラワーです。

花巻市・大村　孝子

お花より

11

橋を渡る日々——41

林　3

×月×日

「チエッカーズ」のメンバーの一人が目黒にいると言う。それで幸代ちゃんは目黒に行きたい。今度お父さんが、東京に行くと言っている。

いくら幸代ちゃんが、東京、目黒と思っていても、お父さんの東京行きが、目黒に結び付くわけではなかった。

幸代ちゃんは東京近辺で生まれ、赤ん坊の時に、ここに来た。両親は、そちらの生まれかというとそうではなく、生地に舞い戻って家を建てた。東京ないし東京近辺で働いたのは、そう長い期間ではなく、お母さんは、小さい車で内職に通っていた。

内職が多い。とうらうは思う。ここに移って感心したことの一つだ。

赤ん坊のいる人は、家で内職をしていたが、たいがいは、集まって仕事をしている。

むかし、ワラ仕事をやった作業場が、

いまは内職場なのだ。責任者は男性とはかぎらず中年のおかさんたちが多い。これにもうらは感心した。裏のナツさんの通う内職場の責任者は、むかしならば、大本家のおかさん風情で、ふっくらとおおらかに、仕事を取り仕切っていた。

お母さんから編物を教えてもらっていると言いながら、幸代ちゃんは、ラメ入りの青いマフラーを見せてくれた。

照美ちゃんは、幸代ちゃんの話を大きい目で見つめ、じっと聞いていた。

田んぼの中に、新しく建つ四軒の家を見て、幸代ちゃんたちは、学校の行き帰り、自分だったらどの家がいいかと決めていたのだという。

照美ちゃんのお気に入りの家は、うららの住居だったそうだ。

照美ちゃんには妹がいた。妹の尚子ちゃんは、この春、一年生になったばかりだ。

幸代ちゃんには、きょうだいがいない。学校から帰り、ソロバンを習いに行き、帰ってテレビを見ながら、お父さんとお母さんの帰りを待つ。

幸代ちゃんに出会った頃、「おばさんお花が好きでしょう」と言い、「おばさん、ひとりぐらしで」と、聞いた。

最初、お姉さんについてやって来た尚子ちゃんは、いつも一緒に通学しているヒロ子ちゃんを連れて来た。

二人はお姉さんたちより早く授業が終わる。ちょっと寄ってみよう。ダメダメ、カバンを置いてきてから……。カバンを置いて、またここまで戻るには遠い。雪になるかもしれない。

尚子ちゃんの傍で、ヒロ子ちゃんはじっとしていた。無口な子かもしれない、とうらは思う。

二月始め、午前中は晴ていたが、午後から雪になった。午後三時半、尚子ちゃんとヒロ子ちゃんが、もう一人友だちを連れてきた。

三人は、クジ引きを作り、当った人が、コタツの周りを回るという、アイデアだった。

珍しくヒロ子ちゃんが、大きな声で張り切っていた。よほどうれしいのだろう。

「おばさんも、はやくはやく」と言われ、うらもそのゲームに参加した。

ひとりでご飯を食べるのかと、ヒロ子ちゃんが聞く。そう聞かれてうららもなぜか、ひとりテーブルで食事をする自分の姿を思い、気が引けた。にぎやかな食卓こそ、「一家団らん」のたとえなのだ。どこの家にも、たいがいはお父さんがいるのにと、それも不思議なのだ。

（つづく）